

世界文学全集 別巻 3

ミ ッ チ ェ ル

風と共に去りぬ

Ⅲ

大久保康雄 竹内道之助 訳

河 出 書 房

世界文学全集 別巻Ⅲ ミッチェルⅢ



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

(本書は日本における翻訳出版権所有者三笠書房の厚意により刊行)

昭和35年4月10日 初版発行

昭和44年11月25日 39版発行

定価 430 円

訳	者	大	久	保	康	雄
		竹	内	道	之	助
発	行	者	中	島	隆	之
印	刷	者	奥	村	正	雄
装		幀	原			弘

印刷・奥村印刷株式会社
製本・株式会社若林製本工場

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京(292) 大代表 3711

振替口座東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
0397—310203—0961

目次

風と共に去りぬ III

第四部（つづき）

第三十九章.....	三
第四十章.....	三五
第四十一章.....	五〇
第四十二章.....	八三
第四十三章.....	一〇六

第四十四章.....	一三七
第四十五章.....	一四〇
第四十六章.....	一七五
第四十七章.....	一八七

第五部

第四十八章.....	三二五
第四十九章.....	三四一
第五十章.....	三七〇
第五十一章.....	三八五

第五十二章.....	三九三
第五十三章.....	三七七
第五十四章.....	三四〇
第五十五章.....	三八八

第五十六章	三二	第六十章	四三
第五十七章	三八	第六十一章	四九
第五十八章	四〇	第六十二章	四七
第五十九章	四二	第六十三章	四四
年譜	四五		
『風と共に去りぬ』について		(生島遼二)	四三

風と共に去りぬ

Ⅲ

主要人物

スカーレット タラの大農場主ジェラルドの長女。アシュレ

に失恋し、チャールズと結婚するが、まもなく未亡人になる。

ジェラルド アイルランド生まれの豪農。オハラ家の主人。

南軍の敗北と妻の死で、ふねけのようになる。

エレン ジェラルドの妻。スカーレットの母。フランス人の血

をひく優雅な貴婦人。戦争中疫病のため世を去る。

スエレン スカーレットの妹。

キャリーン スカーレットの二番目の妹。

チャールズ・ハミルトン ハミルトン家の長男。スカーレッ

トの第一の夫となるが、南カロライナで戦病死する。

アシュレ・ウィルクス ウィルクス家の長男。詩や音楽を好

み、古い南部を愛する貴族的な青年。スカーレットの情熱に

ひかれながら従妹のメラニーと結婚。

メラニー アシュレの貞淑な妻。天使のような善意と寛容の精

神の持ち主。チャールズの妹。

インディア アシュレの妹。

フランク・ケネディ アトランタの材木商。スエレンの許婚

だったが、スカーレットの第二の夫となる。

レット・バトラー 市民から無頼漢として知らわれている

が、戦争を背景に巨万の富をきずきあげた大胆不敵な風雲児。

ベル・ワットリング アトランタの夜の女。レットのなじみ。

ピティバット(ピティ)叔母 チャールズやメラニーの叔母。

老嬢。

マミー エレンが実家からつれてきた黒人侍女。口やかましい

が、まごころをこめてスカーレットのめんどろをみる。

ウィル・ベンティン みよりのない南軍復員少年兵。敗戦後

タラ農場で働く。スエレンと結婚する。

第四部（つづき）

第三十九章

汽車がひどく延着したため、スカーレットがジョーンズボロにおり立ったのは、六月の夕暮れの、消えがての青ざめた薄光が、この田園いたいに、たれこめているころだった。黄色いランプの光が、まばらに残ったこの村の店や民家にともっていた。だが、それもごくわずかだった。住宅が砲弾に碎かれ、あるいは焼けてしまった大通りの建物と建物の間は、いたるところ、大きな間隙ができていた。屋根は砲弾の穴だらけで、壁も半ば吹きとんでしまつて廃墟となつた家々が、暗く静まり返つて彼女を見つめていた。数頭の馬や騾馬が、ブラードの店の木製の日よけの外につないであつた。ほこりっぽい赤土の街道は、人氣もなくひっそりしていた。村にきこえる物音といえは、時おり起こる大きな喚声と、酔つた笑

い声だけで、それは大通りのずつとはずれにある一軒の酒場から、静かな夕暮れの空氣に乗つてただよつてきた。停車場は戦争で焼けて以来、まだ建て直されていず、その跡にわずか木の屋根を葺いただけで、風雨をよけるまわりの壁もなかった。スカーレットは、その下にはいりこんで、小さな空樽の一つに腰をおろした。それは明らかに腰掛けがわりに、そこにおいてあるものだった。彼女は、大通りのあちこちをうかがうようにして、ウィル・ベンティンの姿を探した。ウィルは、ここに出迎えにきていなければならぬのである。ジェラルドが死んだという彼の簡単な知らせを受けとったら、最初の汽車でくることは、わかっているはずだった。

彼女は、大あわてにあわてて出てきたため、小さな旅行かばんには、下着の着換えすら入れず、寝まきと歯ブラシしか、つめてこなかった。自分の喪服を作るひまもなく、ミード夫人からの借りものなので、窮屈な黒い服がぐあい悪くてならなかった。ミード夫人は、いまはやせてしまつたのに、スカーレットのお腹は、大きくなっているの、二重に着心地が悪かつたのである。ジェラルドの死を悲しみながらも、現在の自分のかっこうが念頭から去らず、厭惡の気持ちで自分のからだを見おろし

た。すらりとした姿は、すっかりなくなつて、顔や足首はむくんでいた。これまで、あまりなりふりを気にかけなかったが、あと一時間たたぬうちにアシユレに会うと思ふと、ひどくそれが氣になった。胸は悲しみに痛んではいても、またしてもほかの男の子を宿しているときに彼と顔を合わせると思ふと、なにかたじろぐものを感じた。彼女は彼を愛し、彼も彼女を愛している。このほしくもない子どもが、いまは、その愛にたいする不貞の証拠のように思えた。しかし、ほっそりした腰つきも、軽やかな足つきもなくなった姿を彼に見られるのが、どんなにいやであろうと、いまはもう、どうのがれようもなかった。

彼女は、じれったそうに、足をばたばたさせた。ウィルは迎えにきていなければならぬはずだ。もちろん、ブラードの店まで行つて、彼のことをたずね、もし彼がこられなかったとわかれば、だれかタラまで馬車でつれて行つてくれる人をたのむこともできた。だが彼女は、ブラードの店には行きたくない。ちょうど土曜日の夜だから、この郡の男の半分は、きつとあの店にきているだろう。大きなお腹をかかえ、からだをかくすどころか、かえつてみつともなく見せるような、こんな似合い

もせぬ黒い服をきて、人前に出るのがいやだった。それに、ジェラルドのことで、一せいに親切な同情のことばをかけられるのもいやだった。同情なんか、してもらいたくなかった。だれかが父の名を言っただけでも、泣けてきそうな氣がした。一方、けつして泣くまいと思つた。もし、いったん泣きだしたら、アトランタが陥落し、レットが暗い町はずれの街道に置いてけぼりにしたあの恐ろしい夜、馬のたてがみにすがつて泣きくずれ、胸がかきむしられるほどに恐ろしく、どうしても涙がとまらなかったときのようになるだろうと、わかつていたからである。

いや、絶対に泣くまい！ のどにまた、大きなかたまりがこみ上げてきた。父の死の知らせを受けとつてから、幾度となくそうだった。しかし、泣いたところで、どうにもしかたがないのだ。ただ氣持が乱れ、心が弱くなるだけだ。ああ、どうしてウィルかメラニーか、妹たちが、ジェラルドが病氣になったのを知らせてくれなかったのだろう。そうすれば、すぐに汽車でタラにかけつけ、看護してあげることできたのに。もし必要なら、アトランタの医師をつれて行くこともできたのに。なんてみんな、ばかな人たちのだろう！ あの連中

は、自分がいないと、何もできないのだろうか。からだ
が二つあるわけではなし、一度に両方にいられるわけが
ないではないか。みんなのために、アトラントで、一生
けんめいに働いていることは、神さまだって、知ってい
らっしゃる。

ウィルが、いぜんとして姿をあらわさないため、気分
はいらだち、落ちつかなくなつて、彼女は、樽の上で、
やきもきしていた。どこにいろのだらうと思つたとき、
うしろの鉄道線路の石炭がらを踏みつける音がした。か
らだをよじつてふり向くと、アレックス・フォンティン
が、線路を横ぎつて、からすむぎの袋を肩にかついで荷
馬車のほうに近づいてくるところだつた。

「おや！ スカーレットじゃないか」と叫んで、袋をお
ろし、走りよつてきて、彼女の手をとつた。その苦い、
黒ずんだ小さな顔いっぱいに、よろこびの色をうかべて
いた。「よくやつてきましたね。ウィルは鍛冶屋で馬の
蹄鉄をつけさせていましたよ。汽車がおくれたので、ま
だ間があると思つていたらしい。一っ走り行つて、つれ
てきましようか」

「ええ、お願いするわ、アレックス」悲しくてたまらな
いのだが、にっこり笑いながら、彼女は言つた。昔なじ

みの顔にまた会えて、うれしかったのである。

「あ——あの——スカーレット」と、彼はまだ手をにぎ
つたまま、口ごもるように言つた。「あなたのお父さん
のこと、ほんとうにお気の毒です」

「ありがとう」そんなこと、言つてくれなければよかつ
たのにと思ひながら、彼女は答えた。彼のことばで、ジ
エラルドの血色のよい顔と元気のよい声が、まぎまぎと
よみがえつてきた。

「あなたをなぐさめるわけではないけど、スカーレッ
ト、ぼくたちはあなたのお父さんのことを、この辺一帯
の誇りとしていたのですよ」アレックスは、彼女の手を
離して、ことばをつづけた。「お父さんは——ぼくたち
は、あなたのお父さんは、軍人の本分をつくして、軍人
らしく亡くなられたと思つている」

「いったい、それは、どういう意味なのだろう！ 彼女
の考えは、混乱した。軍人？ 父はだれかに射殺でもさ
れたのだろうか？ トニーのように、南部の裏切り者と
戦つたのだろうか？ しかし、もうそれ以上、深くきい
てはいけなかつた。父のことを話すと、泣いてしまふ。

泣いてはいけないのだ。ウィルと馬車に乗つて、だれも
他人に見られない田舎に出て、もうだいじょうぶと思ふ

ところへ行くまでは、泣いてはいけない。ウィルなら、かまわない。あのひとなら、弟も同じなのだから。

「アレックス、そのお話はよしてくださいな」と彼女は、そっけなく言った。

「ぼくは、すこしもあなたを、とがめる気はないけどね、スカーレット」と、アレックスは、怒りに、さっと顔を赤黒くしながら言った。

「あれがもしぼくの妹だったら、ぼくは、きつと——いや、スカーレット、ぼくは一度も女のひとのことで乱暴なことを言ったおぼえはないけど、ぼくの気持ちをいうと、だれかに生皮の鞭で、スエレンを引っぱたいでもらいたいと思うよ」

「なんてばかなことを、いまごろ、言い出したのだろうと、彼女は、げげんな気持ちだった。スエレンが、いたい、どうしたというのだろう。」

「この辺の連中は、みんな、気の毒ながら、あのひとのことでは、同じ気持ちをもっていますよ。あのひとの肩を持つのはウィルだけだ——それは、もちろん、メラニーさんがいるけど、しかし、メラニーさんは聖女だから、だれのことでも悪く見やしないし——」

「その話は、よしてくださいって言ったでしょう」と、

彼女は冷ややかに言ったが、アレックスは、平気なようすだった。まるで彼女の無作法なのは、心得ているという顔つきだった。それが、かえって頼にさわった。彼女は、他人から、家族の悪口なんぞききなくなかったし、自分が出来事について、何も知らないでいるのを、相手にさとられるのも頼だった。どうしてウィルは、くわしい事情を知らせてよこさなかったのかしら。

アレックスから、やたらに、じろじろ見てもらいいたくなかった。彼には自分のからだの異状がわかっていのだと感じると、困惑した。しかし、夕やみの中で彼女をながめながらアレックスの考えていたことは、これがスカーレットだとは気がつかないと驚くほどに、その顔がすっかり変わってしまったということだった。たぶんそれは、赤ん坊ができたせいだろう。こういうときには、女というものは、まるで悪魔みたいに変わるものだ。それにももちろん、死んだオハラ老人のことを、ひどく悲しんでいるせいもあるに違いない。彼女は老人の愛娘だった。しかし、いや、この変わりようはもっと深刻だ。この前会ったときよりも、いまのほうが、実際は人相がよくなっている。すくなくとも、いまの彼女は、まるで日に三度の食事をたっぷり食べているというふうに見え

る。それに、何かに追われている動物のような目つきも、いくらなくなっている。以前は恐怖におびえ、絶望的だった目が、いまはすっかり落ちついてゐる。笑っているときでも、なんとなく威厳と、自信と、毅然とした風格がある。きつとあのフランクと楽しい生活を送っているのだろう。まったく彼女は変わってしまった。たしかに、美しくはあるが、あの愛らしい、ふんわりとしたやさしみが、その顔からすっかりなくなつたし、男を見上げるときの、だれよりも自分が一ばんよく知っていたあの甘えるようなところが、跡かたもなく消えてしまっている。

しかし、だれもが変わってしまったのではないだろうか。アレックスは自分の粗末な服を見直した。その顔には、またいつもの苦渋の線が浮かんできた。時おり、夜中に眠られぬまま、母はあの仕事をどうするつもりだろうかと案じ、気の毒にも死んでしまったジョーの男の子をどうして教育させようかと心配し、もう一匹驃馬を買う金を、どうして手に入れようかと考えながら、戦争がいつまでもつづいてくれたら、永久に、つづいてくれたらよかったのとさえ思うことがあった。あのころは、みんな自分の幸運のことなど気にもとめていなかった。

軍隊には、たとえとうもろこしパンにしろ、いつも何か食い物があつたし、いつもだれか命令を出すものがあった。こんな、どうにもならぬ問題にぶつかる苦痛感など、ぜんぜんなかった——軍隊にいれば、殺されるということ以外、なんの心配もなかった。それに、あのころは、デイミティ・マンローもいた。アレックスは彼女と結婚したかったのだが、もうそのころには、すでに大ぜいのものが彼をたよりにしていたため、とても結婚なんかできないとさとした。彼は長い間、彼女を愛していたのだが、いまはもう彼女のほおからばら色はあせ、目にも青春の輝きはうせかけていた。トニーがテキサスへ逃げて行きさえしなければよかったのだ。もうひとり男手があつたら、この世の中も、一変していたかもしれない。彼の愛すべき、かんしゃく持ちの弟は一文なしで、西部のどこかにいるのだろう。まったく、みんな変わってしまった。だが変わるのもあたりまえじゃないか。彼は深いため息をついた。

「あなたとフランクとが、トニーのためにつくしてくれたことに、まだお礼を言わなかったですね」と彼は言った。「彼がうまく逃げられたのも、あなたがたのおかげだったのだね。親切に、どうもありがとう。人づて

にきいたところによると、トニーは無事にテキサスにいるそうです。あなたがたに手紙できくのも心配だったので——しかし、あなたかフランクから、お金を借りて行きはしなかったですか。お返ししたいと思うんですが——」

「ああ、アレックス、お願いだから、やめてちょうだい。いまはだめよ！」とスカーレットは叫んだ。このときだけは、さすがに金のことなど考えなくなかったのである。

アレックスは、一瞬、だまりこんだ。

「ウィルをつれてきてあげましよう」と彼は言った。

「あす、お葬式で、みんないっしょになりますね」

彼がからすむぎの袋をとりあげて、立ち去ろうとしたとき、車輪のがたがたした荷馬車が、横丁から出てきて、車輪をきしらせながら、ふたりのほうに近づいてきた。ウィルが座席からどなった。

「おそくなってごめんなさい、スカーレット」

馬車から不器用におりてくると、のろのろと彼女のほうに近づいてきて、からだをかめてそのほおに接吻した。ウィルはこれまで一度も、彼女に接吻なんかしたことはなく、かならず彼女の名まえを「さん」づけで呼ん

でいたので、彼女は驚きながらも、そのためにかえってあたたかい思いがして、とてもうれしかった。彼は注意して彼女を車輪の上にかかえあげ、馬車の中に押しこんだ。見ると、それは彼女がアトランタから逃げだすときに乗ったのと同じ、あのがたがたの古馬車なのに気がついた。よくもまあ、これでもせず、長い間、もったものだ。きつと、ウィルが始終ていねいに、手入れをしていたものであろう。この馬車を見て、あの晩のことを思いだすと、なんとなく胸がうずいた。たとえ自分が、靴をぬいではだしになっても、あるいはピティ叔母の食卓から食物がなくなるようなことになっても、タラに新しい車を買ってやらなければならぬ。この古馬車は焼いてしまおう。

ウィルは、はじめ何もいわなかった。そのほうがスカーレットにはありがたかった。彼は痛んだ麦わら帽を、馬車の後部にほうりこんで、馬に声をかけた。馬車は動きだした。ウィルは前とちつともかわりがなく、ひよろひよろとやせて、髪の毛はうすあかく、目はおだやかで、曳馬ひきうまのように辛抱強かった。

村をあとにして、タラに向かう赤土の道に曲がりこんだ。まだ空の果てには、かすかにあかね色が残ってい

た。むくむくした羽毛のような雲は、金色と、ほのかな緑に染まっていた。田園のたそがれの静けさが、ふたりの周囲におりてきて、祈りのように心をなごやかにした。何か月もの間ここを離れ、この田舎の空気のすがすがしい香り、耕された大地、甘い夏の夜から遠ざかって、よくも自分は、耐えられていたものだ。しつとりとした赤土のおいは、なんともいえないほど、快く、なつかしく、親しかった。馬車からおりて、手にいっぱい、すくいとってみたい気持ちがあった。赤土の道の両側に掘った溝に、青葉をもつれ合わせてたれさがっている。すいかずらは、雨上がりにはいつもそうだった、鋭いほどかぐわしく、この世で一ばん気持ちのよい香りを放っていた。頭上には、一群の家つばめが、さっとすばやく翼をかわして、とび交うていた。時おり、うさぎが驚いてはね上がりながら道を横ぎっていった。白い尾が、綿毛のおしろい刷毛のように、ひよこひよことんでゆく。青々として灌木の茂みが、赤土から威勢よくおい茂っているあたりの、耕された畑の間を通りぬけて行きながら、綿花のできのよいのを、うれしい思いでながめた。何もかも、なんと美しいのだらう！ 低い沼地にただよっているやわらかな灰色の霧、赤土にすくすくと育っている

綿花、緑色の列をうねっているなどらかに傾斜した畑、そうしたものの後方に、黒貂の壁のようにそびえ立っている黒ぐろとした松林。どうしてあんなに長い間、アトランタなんかにいたのだらう？

「オハラさんのことをいう前にね、スカーレット——家に帰りつくまでには、すっかりお話ししようと思ってますがね——ある問題について、あなたの意見をきいたときたことがあるのです。いまはあなたが、なんといつても家長ですからね」

「どういうことなの、ウィル？」

彼は一瞬、おだやかな、真剣なまなざしを向けた。

「ほかでもないんですが、わたしがスエレンと結婚するのを認めてもらいたいのです」

スカーレットは、うしろに落ちそうになるほど驚いて、座席にしがみついた。スエレンと結婚する？ フランク・ケネディを妹から奪って以来、だれかがスエレンと結婚するなどと、思ったこともなかった。スエレンと結婚したいと思うものがあるのだらうか。

「まあ、よかったわ、ウィル！」

「じゃ、異存はないとおっしゃるのですね」

「異存？ ないわ、でも——ほんとうに、ウィル、びっ

くりさせるわねえ！ あなたがスエレンと結婚するんですって？ ウィル、あたし、あなたは、キャリーが好きだとばかり思っていたわ」

ウィルは、じっと馬を見つめながら、手綱を動かした。彼の横顔には、なんの変化もなかったが、彼がかすかにため息をついたような気がした。

「たぶん、そうだったでしょう」と彼は言った。

「じゃ、あの娘のほうで、いやだというの？」

「わたしは、一度も、あのひとにきいたことはないです」

「まあ、ウィル、おばかさんねえ。おききなさいよ。あの娘は、スエレンの倍も値うちがあるわ」

「スカーレット、タラでは、ここんどこ、いろんなことがあったのを、あなたは知らないからですよ。この数か月、あなたは、あまりわたしたちのことを考えてくれなかったでしょう」

「あたしが考えなかったというの？」彼女はいきりたった。「いったい、あたしがアトランタで何をしていたと思っているの？ 四頭立てのりっぱな馬車を取りまわして、舞踏会にでも行っていたと思っているの？ 毎月きちんと、送金していたじゃありませんか？ 税金も払ってあげたし、屋根も葺けば、新しい鋤や騾馬も買ってあ

げたじゃありませんか？ それからまた——」

「まあ、そう興奮して、かんしゃくを起こさないでください」と彼は平静にさげすんだ。「あなたのしていらいしたことを、もし知っているものがあるとすれば、わたしです。このわたしが、一ばんよく知っていますよ。まさに男二人前の仕事をしていらしたのですからね」

いくらか気をよくして、彼女はきいた。「それじゃ、なんだっていうの？」

「なるほど、家の屋根もちゃんと葺きかえてくださったし、食料室にすこしも食物の絶えぬようにしてくださいました。それはわたしだって否定しません。しかしあなたは、このタラでみんなが、それぞれどんな気持ちでいたか、それにたいして頭を使ってくださらなかったじゃないですか。わたしはあなたを責めているわけじゃないですよ、スカーレット。あなたは、そういう人なんです。

人の考えなんかに、たいして気を使ったことがまるでない人なんです。だけど、わたしが申し上げようというのは、わたしが一度もキャリーさんにきかなかったということなんです。きいたところでむだですからね。あのひとは、わたしには妹みたいだった。あのひとは、世間のだれよりも、わたしには、なんでもかくさず話し

ていると思うのです。しかし、あの戦死した青年のことが、片時も忘れられない。これからだって、忘れないでしよう。それに、これは話しておいたほうがいいと思うのですが、あのひとはチャールストンの尼僧院に行くつもりでいるのですよ」

「あなたは冗談を言っているのじゃない？」

「いや、冗談なんか言ってるもんですか。ただ、わたしとしては、お願いしたいのです、スカーレット、そのことであのひとと議論したり、しかったり、笑ったりしないでください。行かせてあげてください。それがいま、あのひとの願いの全部なのです。悲しみに打ちくだかれてしまっているのです」

「だけど、ばかばかしいじゃないの。悲しみに打ちくだかれてる人は、無数にいるのよ。それでも、だれも尼僧院に駆けこみはしなかったじゃないの。あたしをごろんなさい。夫を亡くしたのよ」

「でも、あなたは、悲しみに打ち砕かれはしなかったですからね」と、ウィルはおだやかに言って、馬車の床からわらを拾い上げて、口にくわえ、ゆっくりと噛んだ。こういうされると、彼女も本気になった。ほんとうのことをいわれると、いつもそうなのだが、それがどんなに

やなことであっても、心の底から正直に、それが真実であることを認めざるをえないのである。彼女は、一瞬だまりこんで、キャリーが尼になったところを想像しようとした。

「あのひとをいじめないと、約束してください」

「ええ、いいわ、約束するわ」と言って、彼女は、あらたに見直す気持ちで彼をながめ、いくぶん驚きの念に打たれた。ウィルは、これまでもキャリーを愛していた。いまもなお、彼女の肩を持って、無事に尼僧院には入れるようにと計らってやるほど愛しているのだ。それなのに、スエレンとの結婚を望んでいる。

「それじゃ、スエレンのほうはどうなの？ あなたはあの娘のことなんか思っていないのじゃない？ どうなの？」

「いや、そんなことはありません、愛しているといっているでしょう」と言って、彼はわらを口からとりだし、まるで非常に興味のあるものであるかのように、それを見つめていた。「スエレンは、あなたが思っているほど、悪いひとじゃありませんよ、スカーレット。あのひとは、うまくやっているとだと思いますよ。いまのスエレンについて、ただ一つ心配なのは、夫

と子どもがなくてはだめだということなんです。もっともこれは、どんな女のひとだって、そうでしょうけど」

馬車は、しばらくの間、わだちの跡のいっばいついた道を、がたがたと通って行った。その間、ふたりはだまっていた。スカーレットの頭は忙しく働いた。何かこれには見かけ以上に、もっと深い、重大なわけがあるにちがいない。さもなければ、このおとなしい、物やわらかなウィルが、スエレンのような、ぐちゃぽい、うるさい女と結婚したいなどと思うはずがない。

「あなたは、ほんとうのわけをかくしているのね、ウィル。あたしが家長ならば、知る権利があるわ」

「ごもっともです」とウィルは言った。「あなたには、わかってもらえると思うのです。わたしにはタラが離れられないのですよ。タラはわたしにとっては故郷なんです。スカーレット、タラだけがわたしのほんとうの故郷だったのです。その石の一つ一つまでもわたしは愛している。わたしは、それが自分のものでもあるかのように、その上で働いてきたのです。あなただって何か一つことをやりとおせば、それに愛着をもつようになるでしょう。わたしのいうこと、おわかりでしょう」

彼女には、それがよくわかった。このひと、やは

り、自分がこよなく愛したものを、愛しているのだと知ると、彼にたいするあたたかい愛情のうねりが、胸の中にわき起こってきた。

「それで、わたしはこう思うのです。あなたのお父さんが亡くなって、キャリーンが尼僧院に行ってしまった、あとに残るものといえば、わたしとスエレンだけになる。そうなれば、わたしが今後もずっとタラで暮らすとすれば、スエレンと結婚するよりほかはない。世間がうるさいですからね」

「でも——だって、ウィル、メラニーとアシュレがいるじゃないの——」

アシュレの名が出ると、彼はふり向いて彼女をながめた。その淡い色の目が、何を考えているのか測りかねた。ウィルは自分とアシュレのことを何もかも知っているし、いっさいのみこんでいるのに、とがめようともしない。と、むかしいだいたあの感じが、よみがえってきた。

「あのひとたちは、近いうちに出て行きますよ」

「出て行くって？ どこへ？ タラはあなたの故郷でもあるように、あのひとたちの故郷でもあるのだわ」

「いいえ、あのひとたちの故郷じゃありません。そこな